論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 乙 第 号

氏　　名　　青葉 太郎

論　文　題　目

Assessment of Nodal Status for Perihilar Cholangiocarcinoma
Location, Number, or Ratio of Involved Nodes

（肝門部胆管癌におけるリンパ節転移についての検討）

論文審査担当者

主　査　委　員　名古屋大学教授　小寺泰弘

委　員　名古屋大学教授　後藤秀実

委　員　名古屋大学教授　中村栄男

指導教授　名古屋大学教授　柳野正人

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

肝門部胆管癌におけるリンパ節転移は重大な予後不良因子である。リンパ節への転移率や局在による予後の影響についての報告は存在するが症例数が少なく、議論の余地がある。本研究では320例という豊富な症例のリンパ節転移の状況を再評価することにより、リンパ節転移状況、つまり転移個数、転移率、転移の局在による予後との関連を検討した。この結果、肝門部胆管癌においてはリンパ節転移の個数が最も強力な予後規定因子であること、必要とされるリンパ節の検索個数は5個以上であることが示唆された。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 転移率は検索されたリンパ節全体の個数によって大きく左右される。つまり検索個数が多くなれば、たとえ転移個数が多くても転移率は小さくなるが、転移個数が少なくても検索個数が少ない場合の転移率は大きくなる。肝門部胆管癌での検索されるリンパ節の個数は10個前後が標準的であり、検索個数により大きく左右される転移率より転移個数が予後の指標としては有用であった。
2. 検索個数が極端に少ない場合は、検索されていないリンパ節に転移が隠れている可能性が否定できない。検索リンパ節個数が 4 個以下であると有意に予後不良であったことからも、検索されていないリンパ節の存在が予後不良因子の一つとなると考えられた。
3. 切除標本から容易に剥離できるリンパ節は通常通りの評価が可能である。腫瘍に接するようなリンパ節を無理に剥離すると、主病巣の評価が不可能になる可能性がある。そのため、切除標本のプレパラート上にも存在するリンパ節を改めて顕微鏡的に再評価することが重要であり、本研究でも行った。
4. UICCによるTNM分類に定められている肝十二指腸間膜内と肝門部、総肝動脈周囲のリンパ節は近位とし、その他は遠位として郭清を行った。また傍大動脈リンパ節転移は遠隔転移（M1）として検討を行った。
5. 総検索リンパ節数が少ない症例は、郭清は施行されているが主病巣からリンパ節を剥離困難であるために、リンパ節の個数としては分離できなかったことが要因として考えられる。逆に検索個数が多いものは、大動脈周囲リンパ節まで拡大郭清として施行されていた時期の症例が多く含まれているためであった。

本研究は、肝門部胆管癌のリンパ節転移と予後の関連を明らかにする上で、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

別紙２

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※乙第　　号	氏　名	青葉太郎
試験担当者	主　査 小寺泰弘 後藤秀実 中村哲也		
	指導教授 柳野正人		

（試験の結果の要旨）

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 肝門部胆管癌のリンパ節転移率よりも転移個数が予後規定因子として重要であった点について
2. 検索されるリンパ節の個数が少ないことで予後不良となった点について
3. リンパ節検索の方法について
4. 遠位のリンパ節の検索範囲について
5. 総検索リンパ節数（ＴＬＮＣ）にばらつきが多い原因について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、腫瘍外科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。

別紙３

学力審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※乙第　　号	氏　名	青葉太郎
学　力　審　査 担　　当　　者	主　査 小寺泰弘　後藤孝宗　中川栄治 指導教授 柳野上人		

（学力審査の結果の要旨）

名古屋大学学位規程第１０条第３項に基づく学力審査を実施した結果、大学院医学系研究科博士課程を修了したものと同等以上の学力を有するものと学位審査委員合議の上判定した。